

稳健派ロウハニ師再選果たすも前途多難

国際アナリスト

和田 誠

どこへ向かう 中東の大国イラン



ロウハニ師

中東の大國イランが、大統領選で保守健派の現職、ハッサン・ロウハニ師が勝利した。米トランプ政権が、同国への圧力を高める中での選挙は、欧米6カ国と核合意の中、ロウハニ師と强硬派ライシ前検事総長との闘いになった。イランが欧米諸国との関係改善を進め、国際社会に復帰することは他域だけではなく、世界平和の安定に重要だ。

同国が再び孤立に向かえば、中東の緊張は一気に高まる。ロウハニ政権は、米国との対立克服に極力努めてきた。

気になる反米グループの動き

ここに、シーア派の聖地コムはイラン革命（1979年）の震源地で、住民の支持は反米を叫ぶライシ師が圧倒的人気と言われていた。

革命理念であるイスラム教を基盤とした政教一致体制が、対米融和的なロウハニ師では理念が骨抜きになってしまった。コムはテヘラーンなどと異なり、黒衣で全身を覆った女性が圧倒的で保守的な土地柄の聖地と言える。

もらいたいものだ。

その意味で、ロウハニ師の選挙勝利は国際社会をひとまずホッとさせた。ライシ前検事総長は、最高指導者ハーメネイ師の後継者とも目される有力者で、高止まりの失業率に喘ぐ低所得者層に人気を集め、徹底した強硬反米主義を掲げ選挙戦に臨んだ。

再選されたロウハニ師の課題は、もちろん聖地コムだけではない。

外交面では当面米国にどう対応するかが大きな焦点になる。トランプ大統領は先の外遊で、イランと中東内で対立するサウジアラビアを訪問、さらにイスラエルと「分かちがたい結束」を再確認、イランを強く非難した。

また、ティラーソン米国務長官もイラの非核化に触れ、「非核化を達成することは恐らくできないだろう」と発言するなど、トランプ政権は同国への疑念を露骨に表している。

またイランはシリア内戦で米国側と距離を置き、ロシアと共にシリア・アсад政権の後ろ盾になってきた。

依然として高い若者の失業率

次いで国内問題。失業率は12%を突破、それも若年層の失業率は25~30%と言われている。

早急に失業問題を解決しなければ、直ちに好転するとは思えない。

オバマ政権時に結ばれた核合意は、

欧米諸国が経済制裁解除を引き換えにイランが「核開発制限」したもの

のだった。

しかし、米国は他に人権問題などを理由で制裁を完全解除しておらず、他の国々もイランへの投資を手控えている。

この国は唯一の地下資源石油以外には、これといって目立った輸出品もなく、海外からの投資が経済の核心を握っている状況下にある。

また、ロウハニ政権2期目の行方は、米国の出方が大きなカギとなるに違いない。

まず、ロウハニ政権2期目の行方は、

規制緩和を求める女性や若年層に



サルマン国王の歓待に上機嫌？のトランプ氏（ホワイトハウス）

抱えられた。この支持層が崩れた場合、ロウハニ政権の前途は暗い。

保守強硬派にしてみれば、何と言つても、イスラム教を基盤とした革命以来の統治体制を溶解させてはならない、としており、対立確執は今後さらに深まる恐れがある。

には、オバマ前政権の合意を「史上最悪の取引」と、ハリマジとく批判している。

しかも、イランは今年1月、中距離弾道ミサイルの発射実験を行なつており、トランプ政権はこれに対し

題となる。IS壊滅には、イスラム諸国とともにイランとの連携が不可欠との認識はある、イラン抜きでの中東政策はないだろうの思いが、心底にあると思われるためだ。

リヤドでのトランプ演説からも、そのことを伺わせることができる。

安全保障上、最も重要かつ緊急課題となるIS壊滅には、イスラム諸国とともにイランとの連携が不可欠との認識はある、イラン抜きでの中東政策はないだろうの思いが、心底にあると思われるためだ。

包囲網でサウジと共同戦線
米国とイランの確執は根深い。米国にしてみれば、かつて在イラン米大使館が襲われ、大使館員らが長期にわたって捕われの身となつたことは、米国の外交史上許せない事態で、今でも米国民の中にイラクへの憎悪が横たわっている。

包围網でサウジと共同戦線

米国の外交史上許せない事態で、今でも米国民の中にイラクへの憎悪が横たわっている。

2度にわたって制裁を科している。
過激組織「IS」（イスラム国）対

策はイラン抜きでは進まない。アサド政権を支えて来たことも、問題をより複雑化させている。

しかし、トランプ政権は、イランを非難し続けながらも、このまま放置することは、中東はもとより、世

リヤドでのトランプ演説からも、そのことを伺わせることができる。安全保障上、最も重要かつ緊急課
界平和のために決してプラスにならないことは百も承知のことには違いない。

題となるIS壊滅には、イスラム諸国
ことにより蘭との連携が不可欠との

認識はあり、イラン抜きでの中東政策はないだろうの思いが、心底にあると思われるためだ。

包围網でサウジと共同戦線

わたつて捕われの身となつたことは、米国の外交史上許せない事態で、今でも米国民の中にイランへの憎悪が横

たわっている。

問国にサウジアラビアを選んだ。イスラム教の聖地マカブーを訪問するランと対峙する同国を訪問すること

サウジでは3500億ドル（約39兆円）に上る武器売買契約の他、軍事協力の強化を図った。イランは日本、しかもその多くがコ

シア製で、サウジが米国から、最新鋭の戦車、軍艦、ミサイル防衛システムなどを入手するとなると、中東の安全保障構図が大きく変わることが予測され、イランの中東での勢力範囲につながる。そうなると同国の反

米意識がさらに露骨に表面化する恐れもある。

そのトランプ氏だが、サウジの次に
イスラエルとパレスチナ自治区を訪問
その足でバチカン宮殿を訪ね、ローマ

法王フランシスコと会談した。法王との間では、移民や環境政策であつれきがあつたが、会談後大統領は「あなたのお話は忘れない」と伝えたという。

パレスチナではアッバス議長とも会談、中東和平の仲介に意欲を見せて
いる。

トランプ氏の中東訪問の狙いは、イラン包围網と見られるが、同国の孤

パレスチナに訪問したトランプ氏（ホワイトハウス）



51 ●月刊公論 2017. 7